



福島成蹊中高一貫

学校通信

令和元年 9月5日
令和元年度
第 6 号

またまた芸術…考

校長 本田 哲朗

日増しに秋の気配が濃厚になって来た。ふっと空を見上げたら、空気が澄み渡りずいぶん高く押し上げられた様感じた。実の所、私には、これからのいちにち一日は、一年の中でも最も好きな時間を与えてくれる季節なのだ。理由の一つは、感覚によるのだが、心なしか思考が研ぎ澄まされて来るように感じるからだ。中でも、意識にのぼる事が多くなるのは芸術なのだが、好きな音楽や絵のジャンルに捕らわれないで、興味がわいたモノ(対象)なら何でも味わいたいと思っている。

ところで、ヒトにはなぜ芸術が必要なのだろうか…？ 言うに及ばず、まずはどんなモノでも触れてみれば答えは明白である。良いモノは良いのである。理由付けなど必要ないが、敢えて口にすれば“自分を取り戻せる機会を与えてくれるモノ”と、私は思う。実際にも、触れる事で、気づかずに失っていた自分にもどれる事が多いのだ。

話は変わるが、今年はレオナルド・ダ・ヴィンチの没後 500 年にあたる。ルネサンスの真只中を、天才の名を欲しいままにし、駆け抜けた唯一のヒトである。今春、その軌跡を称え、既に伊・仏の両国間で元首を交えイベントが催されている。おそらく、例え芸術や科学に無縁の人でも、誰一人名前を知らないヒトはいないと思うので、ここで少し触れて見たい。

名前から言うと、単にダビンチ村のレオナルドにすぎない。活躍のステージの一つ、フィレンツェの近隣で私生児として生を受けた。従って、当時の正当な教育は受けていない。しかし、身近な自然と親しみ、深く観察した事は後に何度も懐古している。12 歳の時、フィレンツェにある万能の芸術家、ペロッキオの工房に入る。師は弟子たちに画法・彫刻・金細工…幾何学・機械学・体表解剖・音楽・哲学を、学ばせたと記されている。ちなみに、この工房の系譜にはミケランジェロ、ラファエロ…も名を連ねるのだが、ここでの 18 年に及ぶ追求と錬磨が、後のレオナルドを創ったと言って良いかも知れない。生涯に残された夥しい数の手稿、絵画、機械、都市設計図等は、真にこのヒトの頭脳から生み出されたモノである。

素人の身勝手を許して戴きたい。全くの主観であるが、レオナルドの作品(本物を沢山見た訳ではありません)の印象は、ずばりリアリズムである。それも、同時代の人と比べると、超の二乗の差を感じるものだ。妥協を排する自然そのものの、存在そのモノに…どれだけ近づけるかと言った様な。彼は表層に現れる現象の機構(メカニズム)を追求した。生物なら、解剖を手段とし、また、水や空気(風)なら、観察眼を駆使して渦やカルマン運動を本質として捉えた。そこを折り返しの基点として、表層に舞い戻り、表現したと思えるのだ。つまり、機能の発言として形態があり、反対に、形の中には必ず機能が内在しているとした。

何はともあれ、芸術の良さは感じる事の気ままさや、勝手さにある。人それぞれの感受性、楽しみ方の相違が許容される寛容性だ。時代は変わるが、その価値は永遠の様思う。

